昭和文学全集

30

清岡卓行

上田三四二

高橋たか子

竹西寛子

日野啓三

後藤明生

高井有一

坂上弘

阿部昭

小学館

昭和文学全集

30

清岡卓行

上田三四二

高橋たか子

竹西寛子

日野啓三

後藤明生

高井有一

坂上弘

阿部昭

小学館

昭和文学全集

第30巻

昭和六三年五月一日　初版第一刷発行

著者——清岡卓行　上田三四二　高橋たか子
竹西寛子　日野啓三　後藤明生
高井有一　坂上弘　阿部昭

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館
〒一〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替　東京八—二〇〇番
電話　編集・〇三—二九二—四二五一
業務・〇三—二三〇—五三〇〇
販売・〇三—二三〇—五七二九

印刷——大日本印刷株式会社
製本——大日本印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価 4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568030-X
©T.KIYOOKA M.UEDA T.TAKAHASHI
H.TAKENISHI K.HINO M.GOTO
Y.TAKAI H.SAKAGAMI A.ABE

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

清岡卓行　5

7　アカシヤの大連
45　詩禮傳家
62　二胡幻想
73　邯鄲の庭
84　初冬の大連
102　大連の海辺で
夢のソナチネより
118　遊覧バス
119　蜃気楼のなかの風
120　死体の侵入
121　電車のなかの櫛

上田三四二　125

127　うつしみ
199　岬
209　花衣
219　深んど

高橋たか子　229

231　天の湖
313　人形愛

竹西寛子　331
333　管絃祭
410　神馬
413　兵隊宿
420　湖
日野啓三　425
427　焼跡について
430　あの夕陽
448　天窓のあるガレージ
459　夢の島
後藤明生　519
521　吉野大夫
598　書かれない報告
618　謎の手紙をめぐる数通の手紙
高井有一　635
637　北の河
652　浅い眠りの夜
680　谷間の道
700　俄瀧
724　半日の放浪

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

坂上弘　739
741　野菜売りの声
752　農家
765　百日の後
775　藁のおとし穴
786　遠足の秋
814　川
823　杞憂夢
阿部昭　831
833　司令の休暇
902　一日の労苦
923　桃
931　自転車
937　人生の一日
945　作家アルバム
953　解説　清岡卓行……高橋英夫
958　上田三四二……粟津則雄
963　高橋たか子……上総英郎
968　竹西寛子……古屋健三
973　日野啓三……川本三郎
978　後藤明生……三浦雅士
983　高井有一……西尾幹二

988　坂上弘……秋山駿
993　阿部昭……紅野敏郎
年譜
998　清岡卓行……清岡卓行
1003　上田三四二……上田三四二
1007　高橋たか子……村井健
1011　竹西寛子……竹西寛子
1015　日野啓三……日野啓三
1019　後藤明生……後藤明生
1023　高井有一……高井有一
1027　坂上弘……田谷良一
1031　阿部昭……阿部昭
1036　底本について
1038　用字用語について

清岡卓行

アカシヤの大連

1

かつての日本の植民地の中でおそらく最も美しい都会であったにちがいない大連を、もう一度見たいかと尋ねられたら、彼は長い間ためらったあとで、首を静かに横に振るだろう。見たくないのではない。見ることが不安なのである。もしもう一度、あの懐かしい通りの中に立ったら、おろおろして歩くことさえできなくなるのではないかと、密かに自分を怖れるのだ。

それは、彼が生れ、幼年時代と少年時代を送った町である。いや、それだけではない。第二次大戦があと五箇月ほどで終ろうとしていた頃、東京のある大学の一年生であった彼が、抑えがたい郷愁にかられ、病気でもないのに休学して舞い戻った、実家のあった町、そして、やがて祖国の敗戦を体験し、そのあと三年もずるずると留ることとなり、思いがけなくも結婚した町である。

もっとも、今は、地図や地球儀を眺めても、大連という都会は見つからない。かつて大連と印刷されていたあたりには、旅大という名前が見えるだけである。手頃な辞書をひけば、旅大についてはこんなふうに簡単に書かれているだろう。――中国東北区遼寧省の遼東半島の西南端にあり、大連、旅順、金州、そしてその周辺をあわせた市で、ほぼかつての日本の租借地であった関東州にあたる。

彼が大連から東京に引揚げてきて、もう二十一年以上になる。今は中国の領土に戻り、旅大市の中のたぶん最も賑やかな部分になっているであろうその町のことを、彼はその後、あまり思い出さなかった。生きて行くための目前のことが多すぎたし、妻と子供たちとの楽しい暮しの隙間に、過去が生き生きとよみがえってくるということは、なぜかしらほとんどなかった。

昔の大連のなにかが、ごくまれに過去の深い闇から色あざやかに浮かびあがってくるのは、生活における偶然の珍らしい出来事が、そのときたまたま無心になっていた彼の記憶を、実にうまく刺戟するときに限られていたようである。

たとえば、こんなことがあった。

もう八年ほど前の冬のことであるが、彼が会社員をしていた頃、銀座にあったその勤め先からの帰り道に、いつものように夕ぐれの賑やかな町を散歩しながら、ふと小学生の長男との約束を思いだし、閉店に近いデパートの文房具売場まで慌ててエレヴェーターで昇って行って、地球儀を一つ買ったことがあった。

前の晩、彼の子供は地理を復習しているとき、地図の上の赤道と日附変更線でどうにも眠くなり、彼は子供に、明日、地球儀でそのことを説明してあげると言ったのであった。

彼は、文房具売場のケースの上にいくつか並んでいる地球儀を、そういう場合に買物客がよくするように、手のひらで静かに回転させながら、適当なものを物色した。そのとき、一つの地球儀が、偶然、昔の大連の場所を彼の眼の前につきつけながら、回転をやめたのであった。

北緯四十度、東経百二十度のあたり。黄海の北の方。渤海湾と西朝鮮湾にはさまれている、小さな半島の突端。いかにも天然の良港にふさわしい図形。——彼の視線は、しばらくそこに釘づけにされていた。

デパートを出て、ラッシュ・アワーの人波にもまれながら、彼は自分の頬に感じる夜のはじめの空気の冷たさを、そっと抱きしめてみたいと思った。そして、それからしばらくは、日頃は忘れている幼年時代や少年時代の、さまざまに懐かしい大連のイメージが、彼の脳裡をほのぼのと掠めて過ぎて行ったのであった。

そんな具合に、遠い過去の土地へのノスタルジーが、彼の胸に自然にこみあげてきたことには、ちょうどその頃、アルジェリアの独立の問題が新聞やテレビのニュースを賑わしていたということが、無意識のうちに関係していたかもしれなかった。

実際にも、それから乗った電車のひどい満員の中で、メロンほどの大きさの地球儀がはいったボール紙の箱が押しつぶされないように、吊皮にようやくつかまりながら彼が気を配っていたとき、誰かの携帯ラジオから小さな声が、その問題のそのときの状態を、こんなふうに伝えてきたものであった。

——パリ九日発。フランスのド・ゴール大統領のアルジェリア政策が支持されました。フランス本土で七十五パーセント、現地では、中間報告によりますと、六十パーセントの賛成票を獲得しました。しかし、棄権者も多数にのぼる見込みです……。

彼はそのとき、腕にかかえている箱の中の地球儀を思い浮かべた。そこでは、さまざまな国が色とりどりに塗られている。フランス本国の紫は粋だが、アルジェリアというフランス植民地の紫は、どうにも血なまぐさい。

彼は思った、その血なまぐさい紫も、いずれそのうち塗り変えられることだろう、それはどんな色になるのだろうか、それは淡く地味なものであったとしても、きっと綺麗に見えるにちがいない、と。

しかし、そのとき、彼はふと、アルジェリアで生れ、そこで育ったにちがいない多くのフランス人の子弟のことを連想し、ふしぎな親しみを覚えたのであった。そのときまで、そんな青年たちや少女たちがいるということさえ、彼は想像したことがなかった。また、比較的数多く見る新しいフランス映画でも、そんな青春のドラマがくりひろげられるのを、彼は眺めたことがなかった。彼はなんとなく、そうした青春に語りかけてみたい衝動を感じた。その言葉は、こんなふうに湧いてきた。——きみたちは早くフランスの本国に帰ったほうがいいよ、頑固な親たちを説得するのは大変だろうけれども、あの光栄ある伝統の国へ戻ることに、何の支障もないではないか、ふるさとは、忘れることができるものなのだ……。

彼はそのとき、口をついて出そうになったその言葉に、自分で驚いたものである。ふるさとは、忘れることができる！　今度は、彼の心の方がその暗示的なせりふを追いかけはじめ、自分にとってふるさとは何であったのかと、鋭い痛みをともなう思いに駆られたのであった。

たとえばまた、こんなこともあった。

彼はプロ・ベースボールの試合を見物するのが好きで、ときどき都心にあるそのスタジアムまで出かけて行くが、六年ほど前の秋のある夜、試合中に、グラウンドの上を低く旋回する渡り鳥、アカエリヒレアシシギの一群を間近に眺めたことがあった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

アカエリヒレアシシギは、雀に気がきいたほどの可憐な大きさの鳥である。翼には白い帯のような模様がついている。その四十羽ほどが、まるで観客へのサービスのために、ダイヤモンドの周りをぐるぐると回って、瀟洒な夜間飛行の輪を描いて見せてくれているようであった。

しかし、その中の不運な数羽は、千何百ルックスかの眩しい夜間照明の電球のいくつかをまともに見て、半ば盲いてしまったのか、高く張られた針金のネットに激突して、そこからアンツーカーに落下して死んでしまった。

一方、渡り鳥のために試合を中断されて困惑していた興行管理人は、しばらく夜間照明を全部消してしまい、邪魔ものがまた遠い夜空の旅へもどるのを待った。

グラウンドがまた明るくなって、試合が再開されたとき、たまたまスタジアム関係者の通路のわきの席に坐っていた彼は、落ちて死んだ小さな渡り鳥数羽を持てあましていた場内整理員から、その一羽をもらい受けたのであった。

それは、どういう出来心であったのだろう？　彼の手の平の上に横たわった一羽のアカエリヒレアシシギ。死骸とはまだなんとなく呼びにくいその肉体の、遠のいて行く温かさ、そして、深まって行く重たさ。その触感は、なぜか、彼の血管の隅々にまで伝ってくるような、ふしぎな懐かしさを含んでいた。

それは、自殺ではなかった。しかし、どこかしらに、いわば無への羽搏きに似た、ある種のいさぎよさ、ある種の愚かさがあるようであった。彼はいつのまにか、とりとめもなく過去の中に、アカエリヒレアシシギの死骸が伝えてくる触感に似たものを探していた。

そして、彼の眼は、その小さな渡り鳥の姿を眺めていた。――灰色の頭に白い頬。頸の骨は、ネットにぶつかって折れているのだろう。海の上でも暮すためにヒレをつけた足。胸のあたりの、涎掛けのようにひろがっている茶色っぽい羽毛。それは、たぶん初夏のシベリアで、愛の戯れのために赤味がかった飾りとなっていた見事なエリである。もし今夜死ななかったら、ニューギニアあたりまで、飛んで行くことになったのだろう。アカエリヒレアシシギの習性は、たしか、人間を怖れず、遅鈍である。季節の変り目の旅行では、親子のきずなはかなり淡く、古い世代のグループと新しい世代のグループに分れやすい……。

どれほどの時間、スタジアムの喧噪を非常に遠いものであるかのように聞きながら、彼は過去を静かにまさぐっていただろう？　彼はいつのまにか、自分にとってはショッキングであった少年の日のある出来事に辿りついていた。――それは、彼がたしか中学校の二年生のときであった。大連の町を通過する日本の軍隊はときどき一般の家庭に分散して宿泊した。ある日曜日、彼の家に泊っていた軍人たちが食堂で昼食しているとき、彼は彼らの居室で、好奇心から小銃を手に取ってみた。学校の教練で習ったばかりの安全装置を外し、戯れに、銃口を額に当て、自殺するときはこうするんだなと思いながら、右手の人さし指を引金にかけてみた。しかし、その瞬間、なんとなく怖ろしくなったので、銃口をずらし、そこでやっと引金を引いた。そのとき、すさまじい音を立てて、小銃は火を吐いたのである。弾丸は、分厚い煉瓦の壁にふしぎな形の穴をあけていた。そののちの不気味な静寂、そして硝煙の臭い。真青になった母が、彼の名を呼びながら飛んで来た。

非常に遠いところからありありと蘇ってきたこんな記憶の中で、もしあのとき自分が本当に死んでいたら、母はどんな気持で自分の死体に取縋ったことだろうと、彼はそれまでに思い浮かべたこともなかった、そんなロマネスクな仮定を遥かに描いてみたのであった。そして、母の手はきっと、自分が、今しがた哀れなアカエリヒレアシシギに覚えたも

のとどこかしら実によく似通った触感を、取返すすべもないもののように自分の死体から受けとったにちがいないと空想したのであった。それは、しだいに冷えて重たくなって行く、なんという不用意で不器用な物体であったことだろう！

彼はさらに、その場合には、自分の死は自殺とされただろうか、それとも事故死とされただろうかと、まるでそのときの大連の生々しい雰囲気の中に舞い戻ったかのように、思えば奇妙な興味をしばらく感じていたものであった。

こんなふうに、外部におけるなにかしら偶然の現実が、微妙な回路を経て、彼の心の最も奥底にあるなんらかの問題にまでたどりつくとき、そして、彼の心が記憶の世界にさまよい出るのに好適な状態にあるとき、昔の大連の久しく忘れていたいろいろな思い出が、沁透るように懐かしい実感をもって蘇ってきたのである。

しかし、そのようなことは、ごく稀にしか起らなかった。そんな経験をするのは、二年か三年に一度くらいの割合であっただろう。

なにかの必要から、意識的な努力をして、昔の大連のことを思い出そうとしたりするときなど、そのための記憶をいくつか拾い集めることはできても、それらにはぼんやりとした霧のようなものがいつもかかっていて、すっきりとした鮮かなイメージにまでまとまることはなく、従って、そのような場合には、生々しい懐かしさというほどのものを覚えることはなかった。

平生は、四十代も半ばを過ぎた大学の語学教師である彼の、遠い生れふるさとは、記憶の底に深く眠っていると言ってよかった。

ところが、最近になって様子が変ってきたのである。その原因はたぶん、一年数箇月前に妻を病気で失い、二人の男の子とくらしながら、ひとりで物思いに耽ることが多くなった日々を重ねてきたことにあるように、彼には思われるが、昔の大連についての、あるいは東京から大連へたどりつこうとした旅行などについてのさまざまな記憶が、彼の内側から、まるで数日おきの間歇泉のように、生き生きと浮かびあがってくるのである。それらは、ほとんど脈絡もなく現れては消える断片の群で、彼は不意に凍結を解かれたようなそれらのふしぎな新鮮さに惹かれて、それらのいわば無作為の速記録でも作っておきたいとときどき考えたりするのであるが、一方においては、そんなものはきっと他人にはまるで通じない寝言のようなものではないかと思い、覚書を取ることさえ諦めてしまっている。

しかし、彼はしだいに、そうした記憶の断片の密かな噴出が全体となって描こうとしているものが何であるかを、漠然と予感するようになった。それは、次のような、いささか青春の匂いがする物語らしいのである。

2

東京から大連への彼の最後の旅。それは、一九四五年三月下旬から四月上旬へかけてのことであった。それは、なんという愚かしくも哲学的な旅行であったことか。

小学生、中学生、そして高校生の頃には、それぞれちがった意味においてではあるが、あれほど好きだった旅行を、大学一年生になった彼は、どうしようもなく嫌悪し、また恐怖するようになっていた。旅行というものが、時の流れにつれて、思いがけないことに、避けがたい一種の地獄のようなものに変ってきていたのだ。

そのことは、彼から眺めると、自分の内向的な気持の移ろいにも原因があるように思われた。彼は二十二歳であった。

ある種の青春は、いつかしら急激に、より強く、しかしまた同時に、より優しく生きよ

うとしはじめて、そこに生じる自他の利害のどうしようもない矛盾に、何かのきっかけから異様に悩むものである。その悩みは、時として、生きるということ自体に、行動的にではなく夢想的に、べつなふうに言えば、日常生活的にではなくむしろほとんど形而上学的に傷つくところまで行きつく。

そのように、奇妙に抽象的である憂鬱。それは、大多数の年長者から見れば、生真面目ではあるが青臭いたわ言に過ぎないかもしれない。また、同年輩であっても、世間を渡る辛労を嘗めている連中から見れば、それは甘ったれた頭脳の遊戯に過ぎないかもしれない。しかし、そうした心情の疼きに実際に落ち込んでしまった人間にとっては、それを全身でとにかくもしばらくは苦しみつづけることしかたぶん残っていないだろう。

彼の場合は、十八歳頃からそうした憂悶が始っていた。それは、自分自身をも対象に含めた、生物的なもののいやらしさ一切に反撥する、本能的な苛立ちとでも言えばよかっただろうか？　それとも、あらゆる生命に、時間と空間という否応なしの酷らしい条件を課している、この世の奥深い仕組に対する、静かに狂い立つような怒りとでも言えばよかっただろうか？

それはあるとき不意に、認識への衝動となってこみあげてきたりした。気分が非常に高ぶっているときなど、憂鬱の光学のもとに開かれる視野の鮮かさについて、これはもしかしたら自分しか味わっていない知的な眼覚めではないかと、彼は誇大妄想したりしたものである。

しかし、それは、行為への衝動という面において眺めるときは、若い生命の内部に渦巻く意欲の過剰が、いつからか逆立ちしてしまったような、自殺への親愛であると言わなければならなかった。しかも、それは、金の有無とか、顔の美醜とか、あるいは頭の良し悪しとかいった、具体的で相対的な理由によるものではなく、この世の根源的な原理を思い浮かべるときだけ、奇妙な具合に全身が刺戟されて胸の底から湧いてくる、いわばすべてか無かへの、あるいは甘い熟睡にかたどられる微妙な死への、抑えがたい夢であった。

もっとも、日常生活において彼は、周囲のひとびとと安易に楽しく暮すことを、決して好まなかったわけではない。いや、「楽しく」ということは、他人と関係する日常における、彼の生活の信条でさえあっただろう。もともと、彼の憂鬱のはじまりは、「楽しく」生きようとし過ぎたことの錯誤にあったかもしれなかったのだから。

しかし、そうしたのどかな雰囲気に溺れている場合、以前と変ったことは、どこからともなく、大きな寂しさ、あるいは深い虚しさのようなものが、背後から彼に襲いかかってくることであった。それは、日常的な理由のない離群への拒みがたい誘惑ともなった。彼は結局、周囲との和やかな生活の繰返しに妥協することができなくなり、その孤独な憂鬱ばかりが、徐々に、しかし確実に、その度合を増していたのである。

このような状態に陥った青春は、ふつう、自分の内部から溢れてくる未熟で盲目的な行動への力を持てあましながらも、死を選ぶか否かということは漠然と将来に延期したまま、できることなら、生活の不安のない、そして周囲の無関心によっていわば祝福されているかのような、静寂そのものの密室にひとりぼっちで閉じ籠って、とりとめもなく、自分なりに精魂を傾けた瞑想のようなものに、いつまでも耽っていたいと願うものではないだろうか？

そこに錯綜するであろう物思いの迷路のどこかで、自分を苛む疑問を解くための鍵をうまく見つけることができるかどうか、前途は茫洋として、それはまったく予測がつかないとしても、他の事柄にほとんど煩わせられることなく、ひたすら自分の憂悶と取組むことだけは、どうやらできるのである。それは、

いかにも青春のひとときに相応しい、ほとんど幸福と呼んでもいい苦行ではないだろうか？

そのときの彼の希望も、そのように頑な、しかしまた何かに甘えているような、孤独の生活よりほかの処にはなかった。彼は家庭と社会に対して、微かに自分の我儘を意識していた。しかし、少しは余裕のある家庭に育ったためか、また、この場合の自分によく似た大学の先輩を二、三人見てきたためか、そうした臨時の隠遁への希望が、不当な要求というほどのものになるとは思っていなかった。それどころか、学生には本来、スポーツのように楽しい鍛練であるはずの哲学的な自己幽閉を、少くとも一時期は休学してでも、経験する義務的権利があるのではないかと、彼はむしろそうした行為を、時代に対してほんの少しばかり英雄的になる道草であるかのように考えたがっていた。

そういうわけで、旅行は、そのときの彼の気持からは、きわめて遠く疎ましい処にあった。旅行は、彼が求めている環境とは、ほとんど真反対のものであるように感じられたのである。

彼に好ましい密室において、空間とは、どんなに狭苦しいものであろうと、選び取られた自由の領土であり、位置があって大きさがない幾何学的な点へ向かってどこまでも縮まって行こうとするような、いわば不在への憧れを象る瞑想の座であった。そして、時間とは、どんなに不明瞭なものであろうとも、選び取られた純粋な持続であり、すべての時計を不要にしてどこまでも拡って行こうとするような、いわば永遠の中断への憧れを象る瞑想の軸であった。

そうした空間と時間が絡みあう世界において、彼とお互いに束縛しあう具体的な他人はほとんど存在しないはずであった。しかし一方、そこに現出されるであろう沈黙を通じて、彼は千年の過去における人間、また、千年の未来における人間と、怖ろしいほど静まり返った感覚を共有することができるはずであった。

このように望ましい環境に対して、旅行は、彼によってどのように厭わしく意識されていただろうか？

そこでは、空間がどんなに広広と、美しく珍らしく展開されようとも、また、時間がどんなに明確に、区分され構成されていようとも、それらはひとしく、強いられた移動を証している風景や地名の変化に過ぎなかった。そこに貫かれるであろうものは、持てあました倦怠という軌跡であり、状況によってがんじがらめに捕えられた自分という惨めな意識の流れであった。

そうした空間と時間が組合わされた世界において、彼は偶然に出会う沢山の生身の他人と、煩わしい無言の関係を結ばなければならないはずであった。場合によっては、見たくもない人間のおぞましい内部を、彼は観察しなければならないはずであった。そして、そこに現出されるであろう慌しさによって、彼の自己はほとんど喪失されるはずであった。

一言で言えば、旅行とは、彼にとってまさしく地獄に近いものとなっていた。

もし、予想される旅行に少しばかりの救いがあったとしたら、それは深夜における、列車あるいは汽船の疾走感への期待であっただろうか？

なぜなら、眼を閉じるとき、深夜のそれらの孤独なスピードは、一瞬も途絶えることのないような彼の憂鬱と溶けあい、それを模倣し、憤怒に自分の体を顫わせたり、悔恨の長い煙を引きずったり、あるいは、認識の灯火を燃やしながら暗闇に分け入ったりして、彼をそっと慰めるだろうと思われたから。そして、彼の暗い情熱は、微かに甘美な味わいがあるものにまで変質させられるだろうと思われたから。

しかし、旅行全体のやりきれなさに対して、そのように僅かなものである救いが、彼

にとって一体何になっただろう？　それは、たとえば、彼の席の近くにたまたま坐るかもしれない魅惑的な少女の姿ほどにも、彼を慰めることになりはしないように思われたのである。

このような彼も、大連に戻るためには、旅行の苦痛に進んで耐えたのであった。

3

四月のはじめにやっと大連の実家に辿り着いて、彼は数日のあいだ寝こんだ。頭痛がしたり、熱が三十九度近くになったり、蕁麻疹が出たりした。原因は不明で、どうやら、心の緊張が消えたことと、体の疲れが一度に出たことにかかわりがあるようであった。以前にも、夏休みで帰省したときなど、そんなことがあったので、やはり自分は家庭に甘えているのだろうかと、彼は昔なじみのベッドの中で思った。

その数日間、彼は高い熱のあいまに、ふしぎに快く澄んでくる頭の中で、終ったばかりの旅行のことや、それ以前の一、二年のあいだに日本内地で体験したことなどを、いろいろと思い浮かべていた。彼はすでに、別れたばかりの対象への大きな物理的距離が、自然になんらかの批評を芽生えさせるものであることを経験上知っていた。彼は最近しばらくの過去における自分を、そのような批評を通じて、少しでも客観的に眺めてみたかったのかもしれない。それは、同時に、大連における新しい生活へ喜んではいりこむために、心が通過しなければならない、記憶のいわば検疫所、あるいは税関でもあったのだろう。

もっとも、その記憶の反芻は、それほど整然としたものではなかったけれども。

……東京を離れたのは、三月二十三日の朝だったな。あれから、もう二週間ほどになる。以前だったら、四日あれば帰ってこれたのに。しかし、道連れの後輩がいて助かったというわけだ。地獄だと思っていた旅行も、雑談でそれほど退屈はしなかったのだから。

おれには、どうしてあんな後輩がいるのだろう？　大連の中学校と東京の高校が同じというところまでは珍らしくないけれど、彼は高校を出たら、きっとおれと同じ大学の同じ科にはいってくる。フランス文学科。今や、なんともくたびれ果てた居眠りの場所。

三月十日に江東地区が大空襲されて、その上の夜空が血のように爛れているのを、二子玉川の近くのおれの下宿から、二人で情なさそうに遥かに眺めたときだったな、戦争はどうやら末期的症状だ、どうせいつか近いうちに兵卒として戦場に駆り出され、そこで死ぬことになるだろうから、その前にもう一度だけ、おたがいに実家がある大連を見ようじゃないかと話がまとまったのは。

そのとき彼は、嬉しそうな顔をして、東京での自分の生活を嘲けるように、「空襲、空腹、空火鉢、これじゃ、空元気でも出して、旅をしなけりゃなりません」なんて、語呂あわせのような可笑しなことを呟いていたっけ。

ところで彼は、春休みを一、二箇月勝手に延して、それから東京の学校に戻るということになるのだろうけれど、おれの方は一体どうなるのだ？

大学で休学のための診断書をもらうとき、時計台の下の校医室で、栄養不良のため軍需工場で勤労奉仕を続ける自信がありませんと言ったのは、まずかったな。しかし、おれの青白く痩せた恰好は、たぶん同情に値したんだろう。結局は、診断書を書いてくれたんだから。もっとも、校医は話せるひとだったのかもしれない。おれは、無期休学？　いや、召集がくるまでの休学というわけだ。

それにしても、あの後輩は、やくざな哲学までおれと同じようになってきたな。食い気や色気など、生への執着がなんとなく強くない彼が、もし本当に自殺したら、困るんだけ

れど。彼が美少年でないのは、まったく幸いだ。もしそうだったら、おれに、同性愛を感じないでいるという自信は、なかったかもしれないからな。

彼は幼い頃、親類のひとから、「この子は親に似ないで、おじいさんに似ている」なんて言われたそうだけれど、眼鏡をかけて、色が黒くて、しゃべり方がたどたどしくて、動作がぎごちなくて、骨太の長身で、どことなく老成した感じは、きっと昔から少しずつそんな方向に積み上げられてきたものなんだろう。それに対して、先輩であるおれの方は、青白く痩せて、いくらか小柄で、眼が少し吊って、大いに神経質ときているのだから、どうにも同性愛は成立しそうになかったね。

それにしては、お互いに親切なものだったな。おれが高校の寮にいた頃は、朝寝坊のおれの寝台まで、彼は食堂から毎朝のように食膳を運んでくれたし、おれも、彼のシャツなどに虱がついたとき、すごく熱心にそれを退治してやったものだし——。

もっとも、戦争が進むにつれて蚤や虱がふえた寮にいて、おれは、「虱つぶしに」という日本語の言い廻しをはじめておれなりに理解したんだったな。それは、おれにとって、「徹底的に」という理性的な意味ではなく、「憑かれたように」という情念的な意味だった。「おれは、虱をとるのがうまくなったんだ」と言ったら、彼は情なさそうな顔をして、「そんなことがうまくなっても、しょうがない」なんて、小さな声で言ってたけれど。

寮生たちの多くは、家庭に帰って栄養を補給してきたが、満洲など遠くからやってきていた連中は、いじらしいほど飢えていたな。彼とおれは、千葉の海岸などをうろついては、蛤やさつまいもを買出してきたり、配給だけではどうにも煙草が足りないので、デパートでまだ売っていた紅茶を買ってきては、その葉を辞書のインディヤ・ペーパーで巻いてふかしてみたり——。あの煙の匂いは、少し線香くさく、なんとも佗しい感じだったな。

東京から下関までの満員の列車の中で、車内の通路に新聞紙を敷いて寝ころんだとき、彼は平気でぐうぐう眠っていたけれど、おれはあのときに、旅行が、おれの予想していた地獄とはまた別な地獄でもあることを、漠然と感じはじめていたのではなかったかしら？

旅行における空間と時間の桎梏、それは、夢みられる慕わしい死の無拘束とは、ほぼ真反対のもので、いわば生の煩わしさそのものであったのだけれども、その底から、不気味な新しい死の雰囲気が静かに立ち昇ってきはじめていたのだ。

それがはっきりしてきたのは、下関に着いてからだったな。朝鮮に渡る関釜連絡船の切符がどうしても手にはいらないし、いや、その出港の予定さえ皆目わからないし、今までときどき関釜連絡船がアメリカの潜水艦に撃沈されていることが、生生しい恐怖をもってクローズ・アップされてきたのだった。

その新しい死とは、驚いたことに、最も平凡な死、観念において逆説的にはぐくまれるものではなくて、言葉の本来の意味における死、凄惨な事実において襲いかかってくる死、つまり、人間が本能的に拒もうとする肉体の消滅だったじゃないか。

おれはあのとき、たしか、一年ほど前に下関から関釜連絡船に乗ったことを、鮮かに思いだしながら、こんなことを思っていたんだったな。——一年ほど前のときは、もう連絡船が撃沈されはじめていたけれど、そんなに緊迫した空気はなかったのに。切符もすぐ買えたし、船も予定通り出た。もっとも、海が荒れたのには参ったな。甲板に寝ていて、何遍吐いただろう。おまけに、夜は敵襲を警戒して、乗客は皆、船室に閉じこめられ、灯火がもれないように船窓はすべて鎖されたから、あたりいちめん、怖るべき蒸風呂になっ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com